

宋代天台学と首楞嚴經

大 松 博 典

一

はじめに、中国天台教学史研究の現状についての認識と自らの立場を明記しておく。おおよそ中国天台教学史は次のように概観される。すなわち、天台智顗によって大成された天台教学の体系は、荆溪湛然・四明知礼によって継承された。

それぞれの間には暗黒時代が存在したが、中国天台学の盛華は日本に輸入され今日に至っている。つまり、知礼の教学を最後に中国の天台教学から日本の天台教学に視点が移るのが一般的である。言い換えれば、中国天台教学史は知礼を境にその前後に大きなへだたりを持っており、知礼以後はほとんど顧られないのが実際のところである。ところが、近年さまざまな研究がすすみ、例えば、第二期の暗黒時代といわれるものも決して暗黒時代として片付けられる性格のものではなく、永明延寿に見られる思想を分析すればすでにして宋代天台学の萌芽が見られるようである。この一例からも知られる

ように、従来の固定した見方で教学を語ることに対応できないことが研究の進展とともに明らかにされている。

筆者は研究対象を主に宋代天台学、それも知礼以後にしほり、いろんな機会に宋代天台学研究の必要性を述べてきた。今回の研究もその延長線上にあるが、筆者は曹洞宗侶であり護宗的立場での論究ではないことを付記しておく。

二

知礼以後の教学の様子について一般的に知られることは次のようなことである。すなわち、知礼滅後の教団は、知礼擁護派である知礼門下が栄えいわゆる山外派は全く振るわなかった。時に淨覚仁岳や神智從義が出て教団に論争を巻き起こしたが大勢に影響はなく、四明三家と呼ばれる広智尚賢・神照本如・南屏梵臻の三つの系統が知礼の教学を宣揚していった、と。おそらくこうした見方の根本には広智尚賢の系統に出た大石志盤の『仏祖統紀』の記述が大いに参考になってい

ると思われる。ところが、鳥地大等が既に指摘のように宋代天台宗の学派の分裂は複雑多岐にわたっており、思想的には簡単に分類することが容易であるとは思われない。加えて、今日、当時を知るものとして残されている研究資料のほとんどは知礼系の色彩を色濃く帯びており、そっくりそのまま踏襲することは疑問が残る。さればといってこれ以上の資料を選定し直すことは不可能である。要は、残されている資料をつきあわせ、できる限り当時の教学の実際にせまることである。

安藤俊雄はこの未開拓の分野に初めて足を踏み入れた。彼は『天台性具思想論』『天台思想史』など一連の著作を通して、知礼以後の天台教学を本格的に論じた。先にも述べた四明三家といわれる広智系・神照系・南屏系のそれぞれの教学の特徴を明らかにし、それぞれの系統の代表的人物の行状と教学を明らかにした。さらに、山外派と称された人々の行状と教学についても詳細な検討を加えた。それは天台教学研究史上において紛れもなく一大金字塔を打ちたてたことでもあるし、今日でもわれわれを裨益し研究に資するところ大なるものがある。知礼以後の教学史をこれ以上本格的に述べたものは他に類を見ない。

このように素晴らしい研究成果ではあるが、彼の論証過程には時として無理がある場面も現われる。例えば、淨覚仁岳を

述べる段などはそれである。筆者は先の東大での本学会でその点に関する私見を述べた。概要を繰り返すと、彼の仁岳研究の視点には四点ありその行状と教学を、四明退去の理由・四明退去後の活動・実相論・首楞嚴經との関連から考察し、結局のところ仁岳の教学を山家に対する批判者として公平に判断しようという従来どおりの主張に落ち着かれるのである。筆者はこの論証の中の二点、四明退去の理由と首楞嚴經との関連をとりあげ、さらに宋代天台学における仁岳の位置という視点を加え都合三点の視点から別の見方ができるのではないかという主張をした。問題になる点は、知礼系擁護の立場がはつきりしている『仏祖統紀』の記述をほとんどそのまま採用して仁岳の思想形成過程を類推していることである。換言すれば、後世の歴史観が先入見として働いた記述をそのまま使った点である。それはまた首楞嚴との関連を述べたところにも見られる。彼は言う。

四明退去後、仁岳が最も力を注いだのは首楞嚴經の研究であり、このことは著述の量の多さからいっても明白な事実である。かかる禅宗的な思想系統に属する經典に親んだ仁岳が、年とともに天台の性具説から遠ざかっていったのも当然のことであろう。

と。つまり、仁岳が知礼のもとを去ってから没頭したのは首楞嚴經であり、それは著述量の多さからわかる。その首楞嚴經は禅宗系統の經典でありそれが原因で性具説から遠ざかつ

たというのである。はたしてそうであろうか。この論法では首楞嚴經が禪宗系統だけで重視された經典であるという見方が背後にある。また著述量の多さがそのまま研究姿勢にかかわるとする見方がある。後者についてはそれほど問題がないように思えるが、前者については考えて見る必要がある。

三

首楞嚴經は具名を「大仏頂如来密因修証了義諸菩薩方行首楞嚴經」といい、唐の神亀元年（七〇五）に殷剌密帝が訳出し、これを房融が筆受、弥迦釈迦が訳語したとされる。が、八世紀初頭に中国で編まれた偽經であるとするのが隠当のようである。偽經説のためか日本での研究の跡は見られないが中国では盛んに研鑽されたようである。村中祐生によれば、諸經典に対する現存注釈書を分類してみると時代によって經典に対する関心度に強弱があり、首楞嚴經については宋代以降さかんに研究されたようだという。また彼の言を借りれば、

現存する楞嚴經諸註疏の内、宋代に関するもので注目されるのは、天台教觀に関して、いわゆる山外派に立つ淨覺仁岳が現存天台系の最初の註疏を残していること、明代に関しては神宗の万暦年間を含め明末と清初と并行する期間にわたる凡そ六十年間に、現存する半数の註疏が述作されている。

という。現存する宋代の注釈書は九種類あるが、天台系では

仁岳の『楞嚴經熏聞記』と宗印の『楞嚴經釈題』の二種があり、智円や可観の解釈も一部残っている。それらの解釈については「宋代における首楞嚴經の受容」という論題で既に発表済みであるが、要は、智円・仁岳とも天台教觀の伝統的解釈法によって解釈していることと、山家派もほとんど智円なり仁岳なりの解釈法をとり入れていることである。この点、先の村中も慎重な表現ながら「楞嚴經の解釈に見る天台教義」の中にいう。

後世の非はともかく、智円・仁岳の註疏が最もよく天台教觀の思想に立脚したものであることを、多くの楞嚴注釈家が認めたことは確かである。（中略）楞嚴註疏に関しては、単に山外の説とのみ斥けられない、一つの權威的な形で修学されたものではないだろうか。（中略）宗印において見られる天台系の楞嚴思想の繼承の一端に、智円・仁岳の楞嚴解釈の立場を単に山外の説とのみ排除し尽さない、容認的な姿勢が働いているように考えられる。

と。つまり、首楞嚴經は宋代以降宗派をとわず盛んに研究された經典であり、思想系統が禪宗系統に属するからといって、禪宗の立場からだけ関心がよせられたわけではない。言葉を換えると、安藤が主に『仏祖統紀』の記述を依り所として構築していった仁岳伝は考察し直す必要があるのではないかと。とりわけ、首楞嚴經を介在させて考察した部分、すなわち、禪宗的な思想系統に属する經典に親しんだため天台の伝

統から離れていったという図式は、当時の教学的背景から導き出す結論としては無理がある。

従来の教学史が正統・異端の価値観を持って山家・山外論争を論じて来た点はそろそろ再検討されなければならない。言葉は適切ではないかもしれないが、保守・革新の価値で論争を見てはどうか。すなわち、前代の湛然にさかのぼって解釈を展開しようとするのが保守の山家派であり、必ずしも湛然の教学にとられないで解釈を展開しようとするのが革新の山外派、その立場の違いを鮮明に見せてくれるのが首楞嚴經への対処の仕方にあるのではないか。湛然に首楞嚴經に関する注釈書はない。宋代になって盛んになり始めた首楞嚴經に対して、前代に保証を求めて行こうとする教学姿勢の山家派では対応できない不利があったのではないか。その点リベラルに柔軟に対応することが可能な山外派がいち早く反応し、やがては山家派にまで影響を与えていったのではないか。つまり、首楞嚴經を天台教観の中で何如に位置づけるかが知礼以後の教団では問題とされ、歴史家からは異端とされた智円や仁岳の解釈が、実際は天台の伝統的解釈に組み入れられ研鑽されて行ったと見るのが自然な見方ではないか。

四

以下の三点から問題を整理する。

宋代天台学と首楞嚴經（大松）

第一点、宋代天台学の位置。知礼に至るまでのおよそ五百年の歴史は、現在に至るまでの九百年の歴史を抜きにしては語りつくせない。いつてみれば表の華やかな五百年は裏の地味な九百年を見ることによって、さらに輝きを増す。その転回点はまさに宋代に求められる。つまり、宋代天台学を考えることは中国天台教学史の転回点を探ることに他ならない。

第二点、山家・山外論争の捉え方。正統・異端の価値にとられた論争の捉え方は反省の時期を迎えている。正しいか否かではなく、どのような対処の仕方をしたかが中心に問われなければならない。『仏祖統紀』の記述を依り所として山家・山外を分類し、その主張や論点までが完全な色分けをされて論じられてきた点は省みる必要がある。完全に固定されたものではない。

第三点、首楞嚴經の位置。本經典は宋代になって盛んに研鑽された經典であり、決して禅宗系統だけに支持されたものではない。各宗の碩学が自宗の教学体系の中に何如に位置づけるかに腐心し、自説の開陳を行っていた宋代仏教の自由な学場にこそ研究されるにふさわしい經典であった。

その研鑽の跡をたどることは知礼以後の天台教学を考える上でどうしてもはずすことのできない重要な点である。

△キーワード▽ 宋代天台学、首楞嚴經、天台教学史、山家山外

（専修大学北上高校教諭）